

平成 19 年 7 月 20 日

## 環境システム研究論文集 印刷論文書式のチェックシート(著者用)

環境システム委員会

### 1. はじめに

環境システム研究論文集の印刷論文体裁を統一しクオリティの高い読みやすい論文集とするため、論文の体裁は「環境システム研究論文集」印刷原稿作成要領に従ってください。学会ホームページ上の原稿作成例もご覧ください。以下のチェック項目は主に和文論文用に作られています。英文論文の作成者は、別途必ず作成例を参照してください。(土木学会環境システム委員会ホームページ([www.jsce.or.jp/committee/envsys/index.htm](http://www.jsce.or.jp/committee/envsys/index.htm))の「環境システム研究論文発表会 原稿作成要領および原稿作成例」[www.jsce.or.jp/committee/envsys/index.htm](http://www.jsce.or.jp/committee/envsys/index.htm)を開いてください。現れた一覧表から原稿作成例を選び開けば見ることができます。和文用と英文用とがあります。)

このチェックシートは、著者の皆様に自ら提出原稿をチェックしていただくためのものです。原稿作成後、書式に従っているかの確認をお願いします。項目毎に、確認したら□に✓(チェック)を入れてください。最後に、チェック者のお名前と論文番号・論文タイトルを記入し、チェックシート全ページを完成原稿と一緒に事務局までご送付ください。

### 2. 原稿のチェック項目

#### 2. 1 原稿全体

- ページ数は 12 ページ以内である。(6 ページ以内が原則です。第 7 頁以降は超過頁となり、1 頁 7, 000 円の著者の実費負担となります。カラーページも著者負担が生じます。)
- 1 ページ当たり、和文原稿では 25 文字(または 25 文字程度)48 行(または 48 行以内)、2 段組である。英文原稿では 56 行(または 56 行以内)、2 段組である。(和文・英文とも、ジャスティフィケーションや添え字付き数式記述などの処理により、文字数の多少の増減や行数の減少は許容されます。)
- ページの左右のマージンは 20 mm ずつ、上辺マージンは 19mm、下辺マージンは 24mm である。段と段との間のスペースは約 6 mm である。
- 本文には、和文論文では明朝体 10 pt フォント(またはその類似フォント)を用いている。英文論文では Times-Roman 11pt フォント(またはその類似フォント)を用いている。
- 和文論文では、数字と欧文は、原則半角文字を用いている。
- 句読点は、和文でも全角カンマ「,」と全角ピリオド「.」である。
- カンマ「,」やピリオド「.」や文献番号<sup>3)</sup>が、行の頭に来ていない。

- ページの最下段に章や節の見出しが来ていない。

## 2. 2 第1頁目

- タイトル部分（「論文題目」、「著者名」、「著者の所属」、「論文要旨」、「**Key Words**」）は、横一段組で、上辺マージンから更に約 10mm 下げて始めている。タイトル部分は、左右マージンから更に約 10mm 内側に納めてある。本文は、タイトル部分最終行（**Key Words**）から約 10mm 下げて始まっている。

（以下の項目は和文論文用です。英文論文の場合には、第4ページ3. に飛んでください。）

- 論文題目は、明朝体 ゴシック 20pt で、行の中央に記載した。論文題目が長く 2 行にわたる場合には、適切ところで改行し、それぞれの行でセンターリングしてある。この場合、論文題目 1 行目と論文題目 2 行目との行間が本文の行間と同じ程度であり、空きすぎている。
- 論文題目に副題を設ける場合には、改行し「-副題-」と全角ハイフンで囲み、行の中央に記載した。
- 環境システム委員会からの修正依頼がない限り論文題目の変更は行っておらず、論文題目は応募時と変わっていない。
- 著者名は、論文題目から約 15mm のスペースを空けて、明朝体 12pt で、行の中央に記載した。
- 著者の所属は、著者名の右肩に<sup>1</sup>などとし、その番号順に明朝体 9pt で行の中央に記載した。著者の所属は、著者名から約 5mm スペースを空けて、記載した。
- 環境システム委員会からの修正依頼がない限り、著者の追加や削除は行っておらず、著者名・著者の順番は応募時と変わっていない。
- 論文要旨は、著者の所属の記載から約 10mm のスペースを空けて始めた。明朝体 9pt で、行の中央に記載した。要旨は最大 7 行程度で記載した。行間はスカスカではない。
- 論文要旨の文頭は、一文字下げて記載した。
- **Key Words** は、論文要旨から約 5mm のスペースを空けて、記載した。 **Key Words** という見出しは、ボールドイタリック 10pt で記載した。個々のキーワードは、イタリック 10pt で、英文で 5 個程度（最大 2 行）記載した。個々のキーワードは、単語の最初の文字も含め小文字とし、固有名詞のときだけ大文字で始めた。

## 2. 3 見出しと本文

- **Key Words** と本文開始行とは約 10mm のスペースがある。（広すぎると間延びします。）
- 見出しの章は「1.」、節は「(1)」、項は「a）」で、左詰めで記載した。
- 章の見出しは上 2 行程度空けゴシック 11pt で記載し、下 1 行程度空けて記載した。
- 節の見出しは上 1 行程度空けゴシック 10pt で記載した。

- 項の見出しは上下にスペースを空けずにゴシック 10pt で記載した。
- 本文は明朝体 10pt（またはその類似フォント）を用いている。

#### 2. 4 数式

- 数式用のフォントを用い行の中央に記載した。（数式機能で作成したときのフォントは、ソフトによってはかなり大きなサイズに設定されたものもあります。式の読みやすさと本文フォントとの釣り合いを考え、適切に縮小してください。）
- 式番号は (2) などとして右詰めで記載した。
- 本文中での式の引用は、式(2) などと表記した。
- 本文中で数式中に用いられた文字変数を引用するときには、式と同じフォントを用いた。

#### 2. 5 単位

- 原則として SI 単位系を用いた。従来単位系を用いる場合には、( ) 内に併記した。
- 単位の字体は「斜体」(*m/s*) でなく「立体」(m/s) とした。

#### 2. 6 図・表・写真

- 図・表・写真は、引用する本文の近くに配置した。
- 図・表・写真は、「1 段の幅いっぱい」もしくは「2 段ぶち抜き幅」のいずれかの大きさである。
- 図・表・写真と本文とは約 1 行の余白を設けた。
- 図・写真のキャプションはそれらの下に、表のキャプションはその表の上に記載した。
- キャプションは、明朝 9pt で記載した。
- 図・表・写真の番号は、「表-2 アンケート結果」、「図-5 成長の時間変化」のようにゴシック体にした。
- 本文中で「結果を表-2 に示す。」などと図・表・写真の番号を引用する場合も、上記と同じくゴシック体で記載した。

#### 2. 7 参考文献

- 出現順に参考文献<sup>5)</sup>,<sup>8)</sup> のように右肩に番号を振り、参考文献全てを末尾にまとめてリストとして示した。
- 参考文献 という見出しは、ゴシック 10pt で、上 1 行空けて左詰めで記載した。

#### 2. 8 要旨

- 末尾の英文要旨では、本文から約 10mm 空けて、左右のマージンを更に 10mm ずつ余分に取り、横一段で記載した。
- 英文要旨における論文題目の表記は、Times-Roman 12pt（またはその類似フォント）で

すべて大文字とし行の中央に記載した。

- 論文題目の下 1 行空け、著者名を Times-Roman 12pt（またはその類似フォント）で行の中央に記載し、その下 1 行空けて要旨を記載した。
- 英文要旨には Times-Roman 10pt.（またはその類似フォント）を用いた。
- 英文論文題目から要旨本文までの英文要旨全体で見ても、行間は空きすぎておらず、スカスカではない。

### 3. さいごに

もう一度原稿全体を見てください。

- プリンターの印字にかすれや汚れはありませんか？
- 図・表・写真は内容が読み取れる適切な大きさですか？ きれいですか？
- 1 ページに過大な行数で書き込んでいませんか？ 特に英文論文では、行間の詰めすぎは、極めて読みにくい論文となり論文の完成度評価にも影響します。
- 第 1 頁のタイトル部分（論文題目からキーワードまで）は、対応する和文もしくは英文の原稿作成例と見比べて、奇異な印象はありませんか？
- 第 1 頁のタイトル部分と本文開始行とのスペースの間延び、和文要旨・英文要旨の行間の間延び、などレイアウト上おかしい点はありませんか？

以上です。ご苦労様でした。

最後に、チェックした方のお名前と論文番号・論文タイトルを記入し、完成原稿と一緒に土木学会事務局までご送付ください。体裁の統一にご協力ありがとうございます。

チェックした方のお名前

---

論文番号                      論文タイトル

---

提出いただく原稿は十分に書式チェックができたと思われませんが、論文集作成上どうしても許容できない書式上のミスが万一見つかった場合には、著者に手直しをお願いする場合があります。この場合、書式の訂正のみを環境システム委員会の修正依頼に従って至急に行っていただきます。査読済みの論文本文の改変は、厳にお断りします。修正依頼に従っていただけない場合、論文集への登載をお断りすることもあります。